

FORUM

Vol.23

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

第23号

CONTENTS

巻頭言 2

大阪府立大学大学院 総合リハビリテーション学研究科長
総合リハビリテーション学部長 高畑 進一

コラム 3

初年次ゼミを担当してみて
～万葉歌と入江泰吉氏の写真～

地域連携研究機構地域文化学研究センター長 村田 右富実

新任教員 FD 研修報告 4

授業を育てる

高等教育開発センター 星野 聡孝

授業報告 5

現代システム科学域 知識情報システム学類 准教授
小島 篤博

学生調査データ分析報告 6

一学部体制から学域体制に転換して

府大一年生の学習行動・能力等に変化は見られたか (2) ー

学生FDスタッフ活動 7

編集後記 8



大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

巻頭言

● 大阪府立大学大学院
総合リハビリテーション学
研究科長
総合リハビリテーション学
部部長

高畑進一

TAKABATAKE SHINICHI



高畑進一

TAKABATAKE SHINICHI

大阪府立大学大学院
総合リハビリテーション学研究科長
総合リハビリテーション学部長

1958年生。1980年同志社大学卒業。2004年広島大学大学院医学系研究科博士後期課程修了。博士(保健学)。専門は作業療法学。2012年より現職。

専門職の教育

医療分野に限ったことではありませんが、専門職の教育には様々な指定規則があります。それは、施設・設備、教員数から大綱化したとはいえカリキュラムに至るまで相当に細かな取り決めです。このような規則を設ける背景には、人々が適切なサービスを受けられるよう公的におおよその枠組みを設けて人材を養成するという仕組みがあります。様々な規則を設けることで各養成機関が行う教育内容を担保する。指定規則を満たす養成機関を卒業し国家資格を取得した者に専門的業務を行うことを許す。このような仕組みによって医療や保健・福祉に携わる者が専門職として提供するサービスの質的担保を図っています。近年では、医療専門職が構成する学会や団体が独自にあるいは共同で養成課程の教育評価を行う機関を設置し、各養成機関の教育の質的向上を促す仕組みを整えています。また、これらの学会や団体が主体となり、教育に関する研修や研究大会も頻繁に開催されるようになってきました。このように、医療専門職の卒前教育は公的な枠組みだけでなく各専門職の自主的規範によって質的向上が図られているといえます。とはいえ、卒前教育が担保できるのは最低限の質的保証であり高品質保証ではありません。医学や関連分野の知識・技術の進歩は目覚ましく、社会が各専門職に求める役割も変化しています。つまり養成機関を卒業し国家資格を取得しても医療専門職の教育は完結しません。適切なサービスを必要とする人々のニーズに応えることのできる一人前の専門職となる(あるいは一人前であり続ける)には、免許を与えられ

た後にも学び続けることが必要なのです。高度専門職業人の養成を目的とする大学院は、専門職に学び続ける機会を提供する場の一つといえます。さらに、多くの学会や各職能団体は、専門職が学び続けるための研修制度や生涯教育制度を整備しつつあります。このような制度によって専門職者に自己研鑽する機会を提供し、新たな知識・技術を習得するよう促しているのです。一定のプログラム修了と試験によって高い能力を証明する認定制度や専門制度を設ける職能組織も増えています。これも医療専門職者の生涯に渡る自己研鑽を促そうとするものです。

以上のように、卒前教育だけでなく免許取得後の卒後教育にも枠組みが設けられ、しかも両者の教育が強く関連していることが医療専門職教育の特徴といえます。このような仕組みの専門職教育によって一人の学生が専門家となり、その後も社会のニーズに応えうる一人前の専門家であり続けるには長い時間と努力が必要です。ここから私たちは、教育の主たる目的は一人一人の学生が学び続ける力と態度を獲得すること、という基本的な事柄を再認識しなければならないと思うのです。これは、きわめて当たり前に認識すべきことなのですが、専門職教育に関わる者がつい忘れがちなことのように思うのです(私だけかもしれませんが)。ショートゴールとそれを目指す必要性を示すだけでなく、それを目指す者のモチベーションを高め、成功体験を共有する。このような繰り返しが学び続ける専門職の育成につながると考えているのです。

初年次ゼミを 担当してみても ～万葉歌と入江泰吉氏の写真～

筆者の専門は、日本における現存する最古の歌集として知られる『万葉集』。最終的な成立は 8 世紀中葉～後半と考えられています。まだ、ひらがなやカタカナが存在せず、テキストはすべて漢字。研究は漢字との格闘です。

2013 年度前期、初年次ゼミを担当することになりました。学生数は 14 人。はて、これは困った。日本文学や日本語の研究を志す学生でさえ、漢字との戦いは敬して遠ざけられます。しかし、その一方、1300 年前の歌（しかも恋歌が多い）がまとまって（約 4,500 首）残っているのは世界的にも珍しく、古代人との心情の共通点や相違点は多くの人々の心を捉えており、世間的には『万葉集』は高い人気を誇ります。とはいうものの、理系中心の 1 回生にどう接してもらったらよいのか。

あれこれ考え、筆者が所属する地域文化学研究センターが「入江泰吉記念奈良写真美術館」と「高岡万葉歴史館」とコンソーシアムを組んで推進している「視聴覚を通じた万葉普及事業」に思い至りました。入江泰吉氏は日本を代表する写真家。奈良の風景写真を完成させた人物です。今も、入江氏の発見した撮影ポイントにはアマチュアカメラマンが列をなします。本学では、入江氏を初めとする写真家の写真と万葉歌を取り合わせた講演会をかれこれ 10 回開催しており、毎回 200 ～ 300 名の来場者があります。

もしかすると、これならば学生たちも興

味を持つのではないかと。学生一人一人に担当する歌を与える。学生は指定された参考文献を調査し、内容を把握し、その歌を解説するのに適切な写真を入江氏の写真集から選ぶ。発表では、選んだ写真をプロジェクトに投影しながら、写真と歌の解説をプレゼンする。1 コマあたり 2 人。どちらの方がより歌と写真とを的確に解説・表現できているか、他の学生が評価する。勝敗はもちろん成績には関係しません。

歌というテキストの摂取は、歌を読み、あれこれ考えれば、ある程度可能です。しかし、その摂取した内容を他者に説明することは容易ではありません。また、映像を受容することは容易ですが、その映像によって生じた感覚を表現することは困難です。しかし、どうやらこの二つの外化は相互映発したようで、学生たちは強い興味を示してくれました。

裏を明かせば、歌を与えた時点で「この歌にはこの写真だろうな」という見込みを持っていました（初年次ゼミの皆、もしもこれを読んでいたらごめんね）。その目論見どおりに行く場合もあれば、全く違う写真を選んできて、思いも寄らない解説を施す学生もいました。それは自分の頭の硬化の度合いを実感する瞬間でした。そして、授業が進むにつれ、「入江泰吉記念奈良市写真美術館に連れて行って欲しい」という声が上がることになり、夏休みに入ってから訪館を果たすことができました。

インターネットの普及や技術革新によって、我々の社会は大きな変貌を遂げました。技術や利益の価値が高まり、他者の心の動きを内化したり、自らの心の動きを外化することの価値は下がりました。筆者の担当した初年次ゼミが、他者の心情の内化と自らの心情の外化という基本的営為への何かの足しになったなら望外の幸せです。



村田 右富実

MURATA MIGIFUMI 地域連携研究機構地域文化学研究センター長

1962年生。北海道大学大学院文学研究科単位取得退学。

大阪女子大学助教授を経て、平成19年より大阪府立大学人間社会学部教授。専門は『万葉集』を中心とした日本上代文学。博士(文学)。

新任教員 FD 研修報告

高等教育開発センターでは、新任教員全員を対象に FD 研修を行っています。いくつかのテーマについてセンタースタッフがレクチャーを行う中で、「授業を育てる」は、参加した教員が回答したアンケートの結果で、毎年、非常に好評です。今回は、「授業を育てる」について掲載します。

授業を育てる

高等教育開発センター 星野 聡孝
(高等教育推進機構 教授)

皆さんは、大学時代に教職課程を履修されましたか？私は、残念ながら1回生の前期で挫けてしまいました。そのため、教えるということ、そして、学生が学ぶということについて、ほとんど何の知識も持たないまま、大学教育に携わることになりました。初めて授業を担当することになったあの時に、多少なりとも予備知識を持っていたら、教員としてもう少し良いスタートが切れたのではないかと、今更ながら思っています。

そんな自分自身の経験を踏まえて、高等教育開発センターが毎年開催している「新任教員 FD 研修」では、「授業を育てる」というレクチャーを、ここ数年、担当しています。そこでは、授業をより良いものに育てて行くために、「シラバスを一生懸命書く (Plan)」こと、そして「自分の授業を振り返る (Check)」ことについてお話ししています。これらの内容を補足する意味も込めて、ここでは、私自身が授業について考えていることを、少し書き記しておきたいと思います。

まず、授業を行うにあたっては、全 15 回にわたる授業を設計する必要があるわけですが、理想を追い求めて実現不可能な授業を設計しても仕方ありません。教員自身の経験やスキルに応じて、授業の設計は変わってくるものだと思います。教育に関する経験や知識を増やしていく中で、毎年少しずつ授業の設計をアップデートしていけば良いのではないのでしょうか。そして、授業を育てて行くためには、小さなことで良いから、毎年、何か一つでも新しい試みを授業の中に取り入れていくことが大事なのではないかと思います。私自身、毎年毎年、試行錯誤の連続です。

次に、せっかく何か新しい試みを取り入れたのであれば、それが学生の学びにどう影響を与えたのかを確かめたいところです。授業を実験に例えると分かりやすいでしょう。実験では、条件を少しずつ変えながら結果を見ることで、何が結果に大きく影響を与えるのかを知ることができます。授業も、教育効果を見るための一つの実験と捉えながら行っていくと、授業自身が、そして受講生が、興味深い研究対象のように見えてきます。先生方の知的好奇心を、是非、授業にも向けていただければと思います。

ここで、紙幅が尽きてしまいました。では授業を設計するにあたって何を考えたら良いのか、どうやって学びへの影響を見るのか、といったことについては、レクチャーの方をご覧くださいだと思います。「新任教員 FD 研修」については、すべてのレクチャーについて、

動画と配布資料を高等教育開発センターの web ページ
http://www.fdlas.osakafu-u.ac.jp/seminar/seminar_2014.html

に掲載していますので、是非一度、ご覧下さい (学内限定)。また、興味がある方々向けに、私が担当している二つの講義を以下に公開していますので、こちらも一度、ご覧下さい。

http://www.las.osakafu-u.ac.jp/~a_hoshino/lectures/lectures.html



全学共通の情報科目「情報基礎」

小島 篤博

(現代システム科学域 知識情報システム学類 准教授)

本学では、1年次前期に全学共通の情報科目「情報基礎」を開講しています。「情報基礎」の目的は、大学における学習・研究活動に必要とされる一般的な情報の知識とスキルを身につけることです。近年の情報通信技術の発展スピードは目覚ましく、スマートフォン、タブレットなどの情報機器や、Twitter、LINEなどのアプリケーションのトレンドは年単位で変わって行きます。大学における情報教育においても、普遍的な情報の原理的・基本的な知識と、さまざまな情報環境に対応できる柔軟な操作スキルをバランスよく習得することが求められています。

本学の情報教育は平成9年度よりスタートしましたが、平成24年度からはWebベースの授業支援システム、eラーニング教材などを積極的に取り入れるとともに、情報学を専門とする教員(教科集団「情報」の教員)が担当するという新体制で臨んでいます。現在、各学域、再履修あわせて14クラスを開講しています。

授業の内容は、情報倫理、コンピュータやネットワークのしくみといった情報の基礎知識については、教員による講義とeラーニング教材による自学自習を併用し、各自のペースで進めることができるようにしています。また、PowerPoint、Word、Excelといったアプリケーションの操作については実習形式で実施しています。

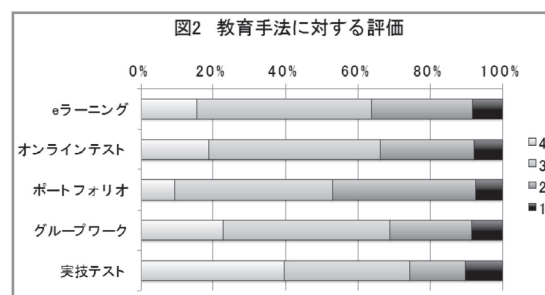
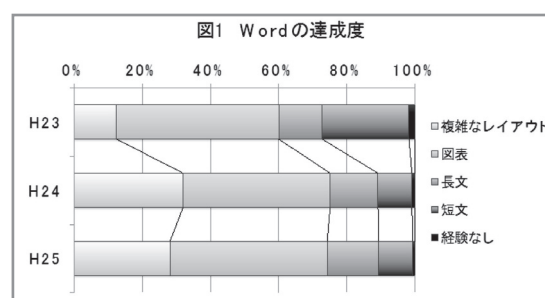
これらの学習項目に対する評価として、授業時間内にオンラインテスト(知識の確認)や実技テスト(アプリケーションの操作)を実施しています。また、毎回授業の終わりに、その回で習得すべき項目に対し振り返りと自己評価を行わせるポートフォリオを記入させています。

「情報基礎」は今年で3年目となりますが、昨年度までの状況をまとめたデータを紹介します。図1は、科目修了時点でのWordの達成度を自己評価させたもので、「使用したことがない」から「複雑なレイアウトの作成例が与えられても同じ文書を作成することができる」まで5段階となっています。グ

ラフは平成23～25年度までの推移を示していますが、23年度は旧カリキュラムの「情報基礎AI/BI」であり、24年度以降の「情報基礎」では達成度が向上していることがわかります。これは、実技テストを導入したことが、操作スキル向上の動機付けとなっていると考えられます。

また図2は、この授業で実施した様々な教育手法について効果があったかどうか、4段階で尋ねた結果です。学生からの反応としては、Word、Excelの実技テストが最も効果的であったとのことで、前述の達成度とも合致しています。eラーニングやオンラインテストも受け入れられているようです。一方、毎回記入させているポートフォリオについては、その意義がなかなか理解してもらえていないという結果でした。ただ、ほとんどの学生が記入自体はしており、教員に対する有益なフィードバックとなっています。

今後も、各クラスの担当教員と情報共有しつつ、より効果的な情報教育ができるよう改善を続けていきたいと考えています。



学生調査データ分析報告

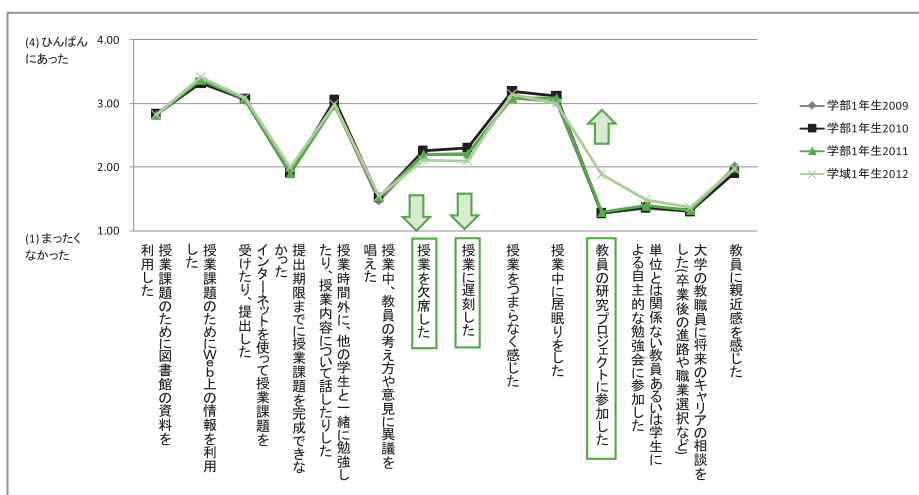
学部体制から学域体制に転換して 府大一年生の学習行動・能力等に変化は見られたか（2）

本学では、IRを通じて大学教育の質保証を目指すことを目的として、全部局の1年生と3年生を対象に学生調査を行っています。アンケート調査では、学生それぞれに大学での学習状況と学生生活に関する満足度を自己評価してもらい、教育の成果を測定することとしています。

昨年度、高等教育開発センターでは「北大生と比較した府大生の特徴 一年生調査2009年－上級生調査2011年比較分析報告書」、「府大生の学習行動・能力等の変化 一年生調査2009年－上級生調査2011年比較分析報告書」、「学部体制から学域体制に転換して府大一年生の学習行動・能力等に変化は見られたか 一年生調査2009－2012年比較分析報告書」の3点を作成し、学内公開いたしました。

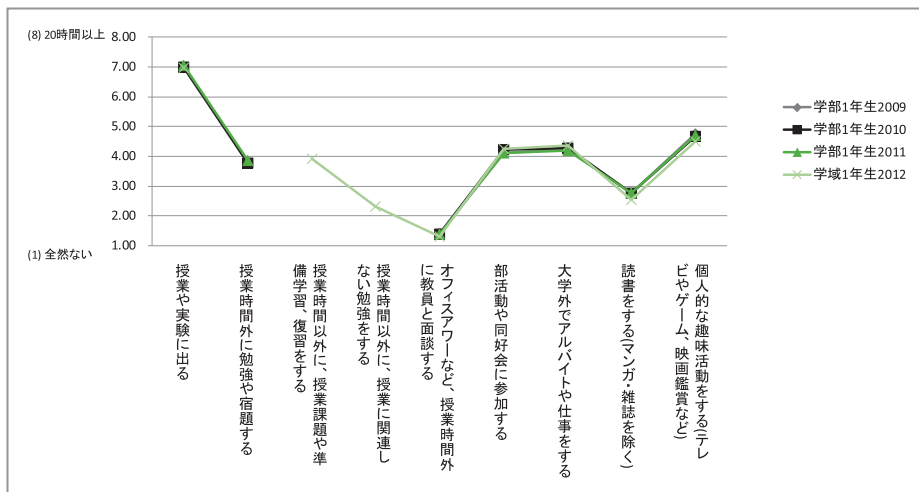
前号に引き続き、学部体制から学域体制に転換した府大一年生の学習行動・能力等の変化を分析した「一年生調査2009－2012年比較分析報告書」より、2点のデータを抜粋して報告します。本報告書は、「一年生調査2009年」「一年生調査2010年」「一年生調査2011年」「一年生調査2012年」を比較したものであり、2009-2011年が旧学部の一年生、2012年が学域の一年生となります。

問 8 府大生はどのような学習経験を多くしたか？



- 2009～2012年でもっとも得点が高かったのは、“授業課題のためにWeb上の情報を利用した”、“授業をつまらなく感じた”、“授業中に居眠りをした”であった。これらの項目は、4年間ほとんど変化していなかった。
- 平均値は高くないが、2012年（学域）にもっとも大きく得点が増加したのは、“教育の研究プロジェクトに参加した”であった。また、わずかではあるが、“授業を欠席した”、“授業に遅刻した”も減少していた。

問 9 府大生は一週間をどのように過ごしているか？



- 2009～2012年でもっとも費やしている時間が長かったのは、“授業や実験に出る”、“個人的な趣味活動をする（テレビやゲーム、映画鑑賞など）”、“大学外でアルバイトや仕事をする”、“部活動や同好会に参加する”であった。これらの項目は、4年間ほとんど変化していなかった。
- 2012年より、授業外学習時間（“授業時間以外に、授業課題や準備学習、復習をする”）と自主学習（“授業時間以外に、授業に関連しない勉強をする”）を分けて尋ねている。自主学習はほとんどなされていないので、結果的に2009-2011年までの“授業時間以外に勉強や宿題をする”はここで言うところの授業外学習時間に相当するものであったと理解される。



“授業を欠席した”、“授業を遅刻した”は減少している一方で、授業外学習時間は4年間ほとんど変わっていません。GPAおよびCAP制の導入、初年次ゼミナール等の改革の効果が表れていないことが見て取れます。『一年生調査2009年－上級生調査2011年比較分析報告書』では「1年生前期のGPAが3年生のGPAをかなり説明する（相関がある）」との分析が出ており、授業外学習時間を増やすための取り組みが課題となっています。（深野）

広く学び続けていく覚悟

工学域物質化学系学類応用化学課程三年生 高松 晃彦

教養科目「環境・生命・倫理」を受講して興味を持った森岡先生の著書『まんが哲学入門 生きるってなんだろう』を読みました。その本を読んで分かったことは、理系の学問だけでは価値を排除された事実を積み重ねていくため、どれだけ勉強しても私が知りたい「一度きりの人生をどう生きればよいのか」「戦争はなぜ起きるのか」という問いに対する答えを与えては



くれない、ということです。そこであらゆる物事を根本から「何故か？」と疑う哲学的な考え方で自分自身を問い直していくと、「工学で考えられる技術は人を不幸にする場合もあるが、それでも技術開発をやめないのだろうか?」「何故私は学問をしているのだろうか。工学は社会貢献が目的になっているはずだが、社会とはそもそも何か?」という問いが浮かんできたので、直接、著者の森岡先生に科学と社会について、倫理の観点からインタビューをお願いしました。

インタビューで森岡先生は次のように答えてくれました。

「経済成長や軍事、医療技術の発展と科学は密接に結びついています。兵器転用の可能性があるのなら、科学という営みをやめた方がいいのではないかと考えることもできます。しかし、難病を治すためには科学の進歩が欠かせないと思う人もいますので、色々な人の立場から考えることが必要だと思います。また、自分の知りたいことを知るためには、様々な学問分野とその方法論に触れることが必要です。しかしどれだけ時間があっても、文系と理系のあらゆる分野を深く探求することはできません。」

インタビューを通じて、理系の研究者こそ自らの作り出した知識や技術が社会でどのように応用されるのかを考え、科学技術の良い面と悪い面を見つめなければいけないと考えるようになりました。また人が生きていくうえで、切実な問いほど明確な答えは存在しないのではないのでしょうか。しかしその切実な問いに、何らかの形で考える座標軸を与えてくれるものが教養だと考えます。人は言葉を使ってしかものを考えることができませんが、言葉は時に嘘になります。それでも言葉と理性の力を信じて、思考の歩みを前に進めるしかない私は信じます。「探し続けていれば見つけることができる」と、小説家の石田衣良さんが言っていますが、これは事実だと大学生活で実感しました。私の抱え込んでいた問いの大部分は、先人が道標を立ててくれていました。しかし、それでも尚十分に考えられていない部分はあります。これから学びは専門化していきますが、化学以外にも広く関心を持ち、深く考えられる人間になりたいと思います。

教員インタビューはこちらに掲載しています。ご覧ください。

http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/gakusei_staff/interview_2.html



編集後記

高等教育開発センターで5年間、事務担当をしていた
だいた廣島はるみさんが、このたび契約期間満了でご
退職になります。FDセミナー、センターwebページ、各
種ポスター類の制作、学生調査(IR)と大学間連携事業
等の、様々な細かい実務を、持ち前のITスキルと温かい
人柄を活かして着実に進めていただきました。

この「フォーラム」も編集事務を担当いただきまし
た。感謝いたします。

さて、2009年から継続して実施している学生調査
の分析結果から、特徴的なデータを掲載(連載)してい
ます。多くの労力と貴重な授業時間を割いて実施して
いる学生調査ですので、しっかり分析するとともに、分
析結果を共有し改善につなげていきたいと考えており
ます。(深野)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース「フォーラム」

平成26年7月31日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
高等教育推進機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

<編集委員> 新井 隆景(センター長) 小島 篤博 高根 雅啓 高橋 哲也 谷口 栄一 車 美愛 塚本 民雄 林 利治 深野 政之(主任)
星野 聡孝(副センター長) ペビン ハンス・ヨアヒム 松坂 裕之 水鳥 能伸 溝上 慎一 山口 義久
<事務担当> 松室 光 岩上 由紀 長尾智香子 廣島はるみ